

チーム北小

時津町立時津北小学校 学校だより
R2.8.9 No.7 文責：岩崎 浩司

<学校教育目標>

家庭、地域とともにめざす児童の姿「思いやり しっかり考え きたえる子」の具現化を通して、「社会を生き抜く力」を身につけた児童を育成する。

<めざす児童の姿>

思いやり しっかり考え きたえる子

今年の夏も暑い日が続いています。感染症対策も引き続き必要です。体調管理などに御留意ください。学校では、平和集会を開き、次のような話をしました（抜粋）。

今日は、全世界で2番目に原子爆弾が、私たちのふるさと長崎に落とされた日です。

1945年、8月9日、午前11時2分、長崎市松山町、原爆落下中心地の上空で、原子爆弾が爆発しました。

今から75年前、長崎の町はあっという間に、様子が変わりました。台風よりももっとすごい風が吹きました。近くの家は跡形もなく吹き飛んだそうです。爆弾が爆発したときの温度は、7000度～9000度といわれていて、太陽の表面よりも高い温度です。想像もできないくらい熱い風が吹きました。ガラスがあっという間に溶け、鉄でさえもぐんにやりと曲がりました。ですから人はひとたまりもありません。一瞬で体が燃えたり溶けたりしました。少し離れたところにいた人々も大やけどを負いました。やけどをした人たちが、水を求めて、浦上の方へ次から次に動いて行きました。あたり一面、家は壊れ、火が燃えていて、人が亡くなって転がっている、想像しただけで、震えがくるほど怖くなりますね。原爆が落とされてから、およそ4か月半、その年の12月の終わりまでに、原爆によって73884人の人々が亡くなり、74909人の人々がけがをしました。原爆の怖いところは、風と熱さだけではなく、放射線があります。放射線は、人に恐ろしい害を与えます。原爆が落とされてから、やけどが軽かった人やけががなかった人も放射線で病気になり、苦しみながら亡くなっていった人がたくさんおられたのです。今でも苦しんでいる人がたくさんいます。放射線の破壊力はそれほど強烈でした。

原爆資料館に行ったことのある人はいますか。そこには、原爆で溶けたガラスや曲がったお金や鉄、燃えた衣服や竹竿などが展示してあります。すごい風や熱で、どれくらいの人かどのような様子で亡くなったのか、放射線で、どのように苦しみどれくらいの人か亡くなったのかもわかります。何より、原爆の怖さ、ひどさ、悲しさがわかります。戦争の悲劇がわかります。原爆資料館に行く機会があったらよく見てきてください。原爆資料館でなくても、先生方が見せてくださる資料や聞かせてくださるお話で、しっかり学習してください。図書室にも、戦争や原爆の本がありますから、それも読んでみてください。

学校のめざす児童像に「思いやり」という言葉があります。明るくおもいやりのある子になってほしいと願って、次の言葉を贈ります。

命を大切にする 五つのしおり、特にあいさつと返事をきちんとする

いじめは絶対に許さず 助け合い 協力し合う心をもつ

やさしさいっぱいの時津北小にして そのやさしさを世界へ広げましょう

これからみなさんが平和を守っていくための大切なことです。

身近な人々と仲良くすること、最初の一步はそこです。

2学期からも、優しさあふれる時津北小学校にしていきましょう。

※裏面にコラムがあります。御覧ください。



来た！北！スマイル

vo.3



一瀬 恵美

例年より遅れて始まった夏休みですが、みなさん楽しんで過ごしているでしょうか。今年はコロナの影響で、北小サマーフェスタという北小の一大イベントもなく、寂しい限りですね。夏のレジャーの幅も狭まっていますが、今は我慢しつつ、「ソーシャルディスタンス」を取らずとも人と人がコミュニケーションを取れるようになる日が戻ることを願っています。本日、8月9日は長崎に住む私たちが忘れてはならない日です。コロナで大変な今だからこそ、平和な世界の大切さ、人と人のつながりの大切さを再確認できるのではないのでしょうか。

今回のテーマは「発達障害」についてです。みなさん、子育てをしていく中で、一度は耳にしたことがある言葉だと思います。発達障害とは、発達障害者支援法において「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」と定義されています（文部科学省 HP より抜粋）。

発達障害として思い浮かぶのが、「ADHD」ではないでしょうか。「ADHD」とは Attention-deficit hyperactivity disorder の略語で、日本では「注意欠如多動症」と訳されています。ADHD の主症状は「不注意」「多動性」「衝動性」と言われ、「不注意」が目立つ方は「不注意優勢型」、「多動性」や「衝動性」が目立つ方は「多動性・衝動性優勢型」、どちらの症状も現れている方は「混合型」と分類されています。一口に ADHD といっても、その症状は人それぞれで一括りにしてしまうことはできません。

発達障害に関してインターネットでは様々な情報が流れており、不確かな情報も多いです。人は感覚の受け取り方に個人差があります。例えば「目を見た情報を処理すること」が得意であったり、「耳で聞いた情報を処理すること」が得意であったり、表情を読み取ることが得意だったり、苦手だったり、ストレスに対する対処が上手だったり、苦手だったり…。どの人も自分の得意なこと、不得意なことがあると思います。発達障害とはあくまでも本人の特性であり、その得意・不得意がちょっと強く出てしまって、それが社会生活を営む上で、学習や人付き合いがうまくいかないなどの「障害」になってしまおうと考えていただけると分かりやすいのかと思います。（あくまで私個人の捉え方です。）発達障害を公表している有名人も多数います。みなさん、自分の特性を生かしてそれぞれの分野で活躍しています。

今回はおおまかに話しましたので、次回からは発達障害の児童が抱える困り感や対処法などを、「自閉症」「学習障害」「注意欠如多動症」に分けてお伝えしていきます。